教職実践研究，（8）：1-16（2018）

＜論　文＞

アクティブラーニングによる英語指導から導く問題解決能力の育成
―クリティカルシンキングの手法による英語学習を通して―

天　久　大　輔※

Fostering Problem Solving Skills through Active Learning Style English Instruction
―Using Critical Thinking Methodologies to Instruct English―

Daisuke AMEKU※

要　約

英語指導において，アクティブラーニングの手法が多くの教育現場に取り入れられている．生徒は，ペアやグループでの共同学習などの活動を通し，課題を発見し，解決しようとする態度を育成する中で，英語の４技能を統合的に向上させることが主な目的である．しかし，昨年度の都道府県別の高校３年の英語力調査において沖縄県が最下位となった．要因の一つとして「英語は必要であると感じているが，能力を伸ばすことができていない」という実態があり教育現場での指導する教師の継続課題である．また，英語学習を通してのグローバルリーダーシップマインドの構築は不可欠である．そのグローバルリーダーとしての要素の１つに問題解決能力の構築がある．英語学習を通し思考力を高め，問題解決能力を身につけることがこれからの次代の英語教育に不可欠である．新学習指導要領に移行し，ALが主流に授業が展開される中で，一つの手法として，クリティカル（以下批判的及びクリティカル）に物事を考え英語学習に取り組む姿勢から，自己達成感を体得し，問題解決能力を体得できるよう授業実践の中で方策を探って行く．

キーワード：AL（アクティブラーニング），クリティカルシンキング，問題解決能力

This paper focuses on using teaching styles in which students learn actively. The instructor managed to help students apply critical thinking skills in a way that ultimately leads to improvement in practical English communication and the development of problem-solving skills that are applicable to real-world situations. This research shows that as a result of the teaching methodology, students tried to think critically in English and effectively generate their own ideas.

Key Words：Active Learning, Critical Thinking, Problem-Solving Skills

※人文学部国際コミュニケーション学科（Faculty of Humanities, Department of International Communication）

1．はじめに

昨年沖縄県内の高校３年生に対し実施された，文部科学省（以下：文科省）による都道府県別英語教育実施調査（2016）によると，英語検定準２級程度以上の英語能力を有する生徒は2，881人（全体の21.8％）と全国で最下位という数字であった．沖縄大学における現１年生の大多数の学生が沖縄出身であるという事実を踏まえ，大学においても学生に対する質の高い授業の提供と英語力の底上げが必須である．文科省（2017）の生徒の英語力向上推進プランによると，生徒の英語力状況結果から，「聞く」「話す」「読む」「書く」の４技能すべてにおいて課題があり，４技能を重視した授業及び入試改革の取り組みの必要性を伝えている．また，沖縄県英語教育改革改善プラン（2017）の基本政策においても英語力及び国際性を身に付けたグローバルに活躍できる人材の育成に重点が置かれ，必然として学生はグローバルマインドを構築し，英語力を高めていかなければならない．去る５月に本学国際コミュニケーション学科１年次に行ったアンケートによる質問に対し，次のような答えが返ってきた．「英語能力を高めることでグローバルリーダーシップマインドの素地を築くことができると思いますか」の質問に対し，73人中，かなり思う（29人），そう思う(39人)，あまり思わない(４人)，まったく思わない（１人）の結果であった．大多数の学生が入学時に英語力を向上させる必要性を感じながら，国際性に富む人材として活躍し社会のニーズに対応していきたいという考えの表れであると捉える．

よって本研究においてはアクティブラーニングで英語を学ぶ手法を活用し，クリティカルに英語で物事を考えられる思考力を育成する．その中で，グローバルリーダーとして必要な要素である問題解決能力を身に付けられる授業実践を展開していく．その過程において，英語で「書く」，「話す」能力の育成に繋げていく．

2．研究内容

(1) アクティブラーニングによる英語授業の展開

文科省（2012）によると，学修者が能動的に学修することによって，認知的，倫理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力の育成を図るとある．また，発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習等が能動的に学習する内容に含まれるが，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法であると述べられている．これは，大学教育の質的転換に向けて主体的に考える力を身につけられる学生を大学教育において育成していく重要性を伝えている．ここで示されている「汎用的能力の育成」の為に，山本（2016:29-30）によると，英語学習の環境は，単にグループで話し合いをする場としての学びだけでなく，自立した学習者を育てることを目的とした学びを授業の中で展開すると述べている．また，その中で教師は生徒が学習をスムーズに進められるよう支援する役割であるファシリテーターとして，授業の目標を明確に示し，達成できるよう努めなければならないとしている．

上記に示されていることから，英語学習においても，能動的に学ぶ目的とは，単に英語での表現力を高めだけではなく，英語での思考力を深められるような活動を展開していくことを意味しているのである．

(2) 批判的思考（クリティカル・シンキング）とは

物事を批判的に捉え，英語の思考力を高める学習を授業に取り入れる上で，Bloom（1956:17-19）の批判的思考の６段階モデルを基に改定された，Anderson& Krathwohl（2001:30-31）の６つのステージをもとに考察していきたい．図１は，矢印の方角へと学びを深め，思考レベルを高めることを意味している．下の段から，①記憶，②理解，③応用，④分析，⑤評価，⑥創造，の順へ段階的に学びを高め，思考力向上を目指すモデルで

ある．我々の英語学習をこのモデルに適合すると，①から②の段階にかけての学習は，中学・高校の学習段階においてで徹底されていると考える．つまり，この段階においては英文法や語彙を記憶し，長文読解へと理解する英語学習である．また，この①と②の段階においては，英語を話す上で不可欠であるインプットの量，つまり英語を理解する上でのリスニング及びリーディングの強化に繋がる段階であり，基礎的な英語力を身につける上では重要なステージである．また，③の応用ステージから⑥の創造ステージにかけての批判的思考力の向上を目指す英語学習の授業展開は，現在ALにおいて実践されようとしている手法である．これからの英語学習において，生徒が④の分析から⑥の創造にかけて思考力を伸長し，英語力を引き上げていくことは必須である．同時に，教師は生徒の英語思考力を活性化し，創造力を深め，新しい発想を生み出せる指導をしていかなければならない．

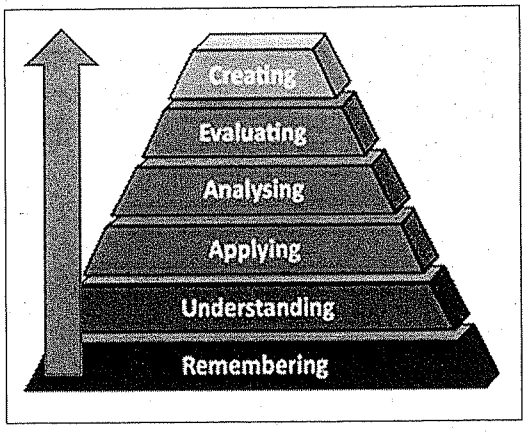

図１　批判的思考６段階モデル
Anderson & Krathwohl (2001)

(3)　批判的思考力を高める英語教育とは

上記の批判的思考６段階モデルを踏まえ，批判的思考能力を高めるため，どのように授業を展開していくべきであろうか．批判的思考とは，相手が述べている事に対し，逆の立場（批判的な立場）を論理的に述べる事で，自己の意見（ここでは相手とは逆の考え）を正当化しようする思考と捉えられる傾向がある．しかし楠見（2012）によると，批判的思考を，指導の観点から３つに分類している．

表１　中央教育審議会高等学校教育部会
批判的思考について　より一部抜粋

①　証拠に基づく論理的で隔たりのない思考
②　内省的思考（リフレクション）
③　問題解決や判断を支えるジェネリック（汎用的）スキル

上記に示されているように，批判的思考力を高めるとは，物事を客観的にとらえ，相手の意見・主張を非難するのではなく，自己の思考を意識的に吟味し，目標志向的でなければならない事を意味している．つまり，様々な問題に直面した際に，膨大な情報が提供される現代において，適切に物事を選択及び判断し，解決していける能力を身につけていかなければならない．

また，鳥飼（2017:218-219）は，これからの人工知能（AI）や拡散現実（AR）の発展に伴い，情報を正しく選択できるような批判的思考の能力を備えた人間が必要になる時代が迫ってきていると述べている．つまり，英語学習において，次代を生きる生徒はこれから直面する様々な問題に対し，どのように解決していくかを身につけなければならない．同時に教師は生徒を育てる役割であるという認識を高めていくことが大切である．

(4)　批判的思考力を高める英語授業の展開

内田（2015）は批判的能力を高める上で，英語の授業を以下①～④の流れで展開している．

表２　内田浩樹教授のライブ授業シリーズ
PART 6　より　抜粋（2015）

①　トピックについて日本語で話し合う．（日本語で考える）
②　トピックについてプラス・マイナスの要素を見つける．（日本語で考える）
③　トピックについてプラス・マイナスの要素を見つける．（英語で考える）
④　議論を進めるために必要な情報を見つけ出す．（日本語・英語において）

内田による批判的思考力を高める英語授業の実践において，物事をクリティカルに考える授業を初めに展開するにあたり，英語ではなく，日本語によって授業を展開していることである．これは，英語力の優劣に関係なく，批判的思考をプロセスとして日本語で理解することで，英語での深い学びへと繋げる手助けとなるからであろう．日本学術会議(2016)における「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み」においても以下のように言及されている．

> “わが国が今後目指すべきは，英語という特 定の言語の，しかも話しことばに限定した運用能力の養成ではなく，児童・生徒ひとり ひ　とりが自ら進んで外国語に立ち向かうことを可能にする，ことば一般に対する幅広い 理解と能動的態度の育成であると考える．”

つまり，英語運用能力の育成はもちろんのこと，語学（ここでは英語）を学びたいという前向きな態度の育成を構築する上では，「英語で批判的思考能力を高める」というプロセスを身につける前に，日本語において批判的思考のプロセスを理解させることが大前提になるのだ．

内田の英語での批判的思考力を高める授業の展開で，表２に示した①から④までの授業展開では，第一に，トピックについての日本語での深い理解を学習の中に取り入れている．例えば，「大学生は中国語を必修で履修する科目として設定しなければならない」というテーマに対して，日本語で具体的に考える内容例としては，以下のようになるであろう．

・中国語の必要性
・中国語へ対する興味
・将来の仕事への結びつき
・中国文化の理解
・中国人の人間性

中国語を学ぶ上で，様々な要素を360度の角度から考え，表２の②にあるそれぞれのプラス（メリット）及びマイナス（デメリット）に分けて考え，表２の③にあるように日本語から英語へ変換し，議論する方向性を見いだしていく授業展開である．上記の表２にある①～④の一連の流れを授業の中で展開していくことで，段階的に日本語から英語への批判的思考能力の育成を図ろうとする狙いである．

この内田（2015）の英語での批判的思考力育成の授業構成を，先の図１で示した，到達すべき学習目標レベルである創造（Creating）へと結びつけることで，英語を学び，創造性を高め，様々な問題解決に役立てることができるのではないかと考える．そのような理由から，筆者の授業においては，先の表２で示した①～④の内容の後に，以下のような表３の構成で授業を行うことで，英語での批判的思考力の育成をさらに深く構築できると考える．

表３　内田浩樹教授のライブ授業シリーズ PART 6　より　抜粋
一部修正引用（下線部分は筆者が挿入）

①　トピックについて英語で話し合う．（英語での考える）
②　トピックについてプラス・マイナスの要素を見つける．（英語で考える）
③　議論を進める為に必要な情報を見つけ出す．（英語において）
④　議論する中で，<u>新しい発想を生み出し，諸問題に対して解決しようという態度を育む．</u>

上記の表３においては，日本語で物事を批判的に捉える思考力を土台とし，英語での批判的思考力を高めることを目指す．さらに，英語で新しい発想を生み出してみようという授業展開である．ここでの「新しい発想」とは問題を発見し解決しようとする能力の事を示している．これは，新学習指導要領（2017: 4）の第１章　総則の第１の３において，以下のように育成を目指す，資質能力の３つの柱に合致している．

表４　新学習指導要領　第１章　総則
第１の３　資質・能力

①　知識及び技能が習得されるようにすること
②　思考力，判断力，表現力等を育成すること
③　学びに向かう力，人間性等を涵養すること

英語学習者としての資質・能力の向上には，表４で示した３つの柱が重要になってくる．この３つの柱は，筆者がこれから展開する授業と以下のような関わりを持っている．

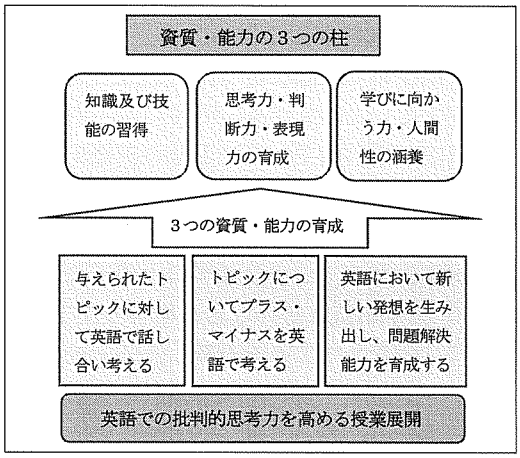

図２　資質・能力と英語での批判的思考力を高める授業の関連性

上記に示すように，個々の英語における資質・能力の向上を狙いとする授業展開が，批判的思考能力の向上と相互に大きく関わっていると考えられる．中でも英語において新しい発想を生み出し，問題解決能力を身につけることは，思考力・判断力・表現力の向上，さらに社会の様々な諸問題に対し涵養な態度で物事を考えられる英語学習者を育成できるのではないかと捉える．

(5)　グローバルリーダーの育成とは

21世紀における知識基盤型社会において，社会はさらにグローバル化し，その中で自己のアイデンティティーを確立しながら，競争社会において優れた労働力を発揮しなければならない．グローバルリーダーとはまさに，そのような社会で自己を発揮できる人材を，グローバルリーダーと捉えていいかと考える．

そのような人材を育成するには指導する側の能力を最大限に生徒へ発揮していかなければならない．ここで，Malm（2009）は，これからの教師にとって必要な資質・能力について以下のように６つの点で述べている．

表５　教師に必要とされる能力・資質
Malm（2009）

①　創造的で省察的な思考力を育てること
②　批判的思考を高めること
③　教師の哲学的・教授学的な意識を高めること
④　教授の感情的側面とともに認知的側面を強調すること
⑤　共感や対人関係の協同にかかわる教師の能力を鍛えること
⑥　道徳的・論理的な職業としての教授とは何かについて各自が理解を深めてゆくこと

このように，教師に求められる，資質・能力は様々であるが，授業において，目的に応じ柔軟な姿勢で生徒に指導していかなければならない．また，Dismmock（2011）によると，21世紀型学習を作るリーダーシップの枠組みとして，21世紀の職場においてはイノベーティブで創造的なスキルや批判的思考力，問題解決能力，高いICTスキルを身につける事がグローバルリーダーとしての条件であると示している．上記にある教師に求められる資質・能力がこれからを生き抜く生徒が身につけなければならないスキルと相互に作用していることを意味する．つまり個々の能力に応じながら段階的にグローバルリーダー育成へ向けて授業を展開していくことが不可欠である．

(6)　問題解決能力とは

どのような教科においても，指導する立場や学ぶ立場に関わらず，問題解決能力は身につけなければならないスキルである．

OECD（2013:121-123）によって以下のように問題解決能力は定義されている．

> “問題解決能力とは，解決の方法が直ぐには分からない問題状況を理解し，問題解決のために，認知的プロセスに関わろうとする個人の能力であり，そこには建設的で思慮深い一市民として，個人の可能性を実現するために自ら進んで問題状況に関わろうとする意思も含まれる.”

つまり，問題状況を理解するとは，問題を把握する，つまり発見することを意味し，そして個々の認知的プロセス（ここでは思考力）を働かせることで，問題状況に関わる（社会に適応する能力）力の体得を目指すと捉える．英語学習においても，鳥飼（2013:164-165）がは以下のように指摘している．

> “大学という場は「ものを考える場」であるはずなのに，なぜか英語教育には「考える」ことが期待されず，もっぱらスキル習得が求められる．しかし，英語を使うという実践にそのことが意味する知を与えることこそが大学英語教育の存在意義ではないのか．英語という外国語を通して自己と他者の関連性を学び，自文化を相対化し，異文化を理解することの意味を問い，コミュニケーションの有りようを批判的に検討する．外国語を学ぶことで複眼的な視点を得ることは他者理解への第一歩であり，それに気づくような教育を行うことは大学教育の使命である.”

これは，英語はスキルを身につける表現力にとどまらず，批判的に物事を考える能力，つまり，思考力・判断力を身につけ，人間性の涵養を目指すべきだと考える．英語学習において，問題を発見し解決できる能力を育成するためには，先の鳥飼（2013:164-165）が述べるよう，批判的思考力の向上を目指す授業展開は不可欠であることを意味している．

(7) 英語でのアウトプット能力（話す・書く力とは）

2010年のTOEFLスコアのアジア国別の順位（ETS 2010）で，日本は30カ国中27位で，スピーキングのスコアだけを見ると最下位である．また，ＴＯＥＦＬスコアの世界の母語別の順位では113カ国中103位で，スピーキングの能力においては全体の中で最下位である．この結果からも，急速な社会のグローバル化に対応するためには，これから英語で話す能力を身につけていくことはとても重要である．学習指導要領においては，「情報や考えなどについて，話し合ったり意見の交換をしたりする」と話す活動の内容に示されているように，教室内でいかに生徒の英語を話す能力を引き伸ばしていくかがこれからの課題である．また，菅原(2011:56-58)は英語でメッセージを伝える，つまり話すこと書くことについて，相手が伝えたいことを理解した上で，自分自身で考えたことや判断したことをアウトプット（話す・書く）する重要性を伝えている．本授業においては，ペアやグループにおいて批判的に物事を考えられる英語思考力を養い，相手に伝え，そして相手の発言を注意深く聞き，理解することが前提となる．そして，自ら考えて新しい発想を生み出し，何を伝えたいのかを考えさせ，英語で伝えたい内容を書き，そして話す取り組みを行わなければならない．

3．「問題発見演習Ｉ」の科目の特性

本科目は，本学の全学科における必履修科目である．本大学は４年間を通しゼミを受講することになっており，この「問題発見演習Ｉ」においては，１年次の前期で学生は履修を行う.この講義の目的は，大学における勉強をスタートする上で最も基本となる以下の４点を目的としている．

① 他者と積極的に交流できる「ソーシャルスキル」
② 大学での学びを円滑にできる「スタデ

イスキル」

③　在学時及び卒業後の生活設計を適切に行うことができる「ライフデザイン」

④　日本語能力とコミュニケーション能力の向上

上記が示すように，大学においてどのように学ぶかを知り，相互に関わることでコミュニケーション能力を高めていく事が目的とされている．この「問題発見演習Ⅰ」は，アカデミックな場において，日本語で適切に相手に物事を伝えたり，理解したりと他者との関わりを重視しながらペア，グループなどの演習形式が主として行われる講義である．その中で，筆者が受け持つ「問題発見演習Ⅰ」は国際コミュニケーション学科の学生が受講生である．英語学習に興味のあることから，日本語コミュニケーション能力の向上から，発展的にクリティカルに英語で物事を考えられる思考力を育成する授業を展開していく．その中で問題解決能力を体得できる授業実践を行う．

４．クリティカルシンキングの手法を主とした英語学習を通し，英語での思考力を高める授業内容

(1)　授業実施日

2017年度前期，「問題発見演習Ⅰ」（火曜日：４時限目）全15回の授業の中，後半の５回を以下の授業スケジュールで授業を展開した．

表６　Topic①～④は内田（2015）のライブ授業シリーズPart ６より抜粋

日　程	授　業　内　容
６月27日 （１回目）	批判的思考力について知る Topic①（Organ Donation, Global Warming） 日本語で理解する
７月４日 （２回目）	批判的思考を高める実践１ ペアにおいてTopic②（～あなたは人の心が読む能力があります～）について日本語でプラスとマイナスを考え，英訳する
７月11日 （３回目）	批判的思考を高める実践２ グループにおいてTopic③ （In most countries, people drive on the right-hand of the road. Japan should change from the left-hand side to be like other countries.）について理解し，プラスとマイナスの面を英語で考え解決策を英語で書き出し発表する
７月18日 （４回目）	批判的思考を高める実践３ グループにおいて Topic④ （In 1974,harmful substance was detected from imported oranges. The substance was found in the wax on the surface of the oranges. The substance causes cancers. Japanese government banned the import.） Topic⑤ （In order to slow down global warming, you should carry your own chopsticks instead of using waribashi.） について理解を深め，英語でプラスとマイナスを導き出し，発表する
７月19日 （５回目）	批判的思考を高める実践４ グループにおいてTopic⑥ （One in 6 children I Japan live in poverty. The poverty causes wide disparity in the academic ability of students） について理解を深め，英語でプラスとマイナスを導き出し，解決策を発表する

(2)　授業目標

１年次の「問題発見演習Ⅰ」の授業において，１回目～10回目の授業においては，日本語での思考力を高める活動や課題を主に行った．行った内容は以下の通りである．

①　10回分の新聞記事の要約（50字程度）

②　一冊の本を読んでのレポート（800字程度）

③　ゼミ研修の計画

④　現在の社会問題で興味のあるトピックについてレポート（800字程度）

内容は以下の通りである．

１．その問題はなぜ起こっているのか

２．その問題は何を引き起こしているか

３．その問題に対する解決策

４．調べての感想

上記①～④を前半部の授業（全10回）で実施し，１人１人が発表を行った．よって，日本語で考え，レポートを書き，発表するという一連の講義の流れを構築することで，学生は互いに話し合い，思考力を高め，問題解決能力を構築しようと努力したと考える．このこ

とから，後半の５回分の講義においては，アクティブラーニングの手法で批判的に英語で物事を考え，問題解決能力を身につけられる授業実践を展開する．その中で，英語で「書く」，「話す」能力の育成を目標とする．その５回分の授業の内容は先の表６に示した通りである．

⑶　受講生

本学の国際コミュニケーション学科の１学年の学生18名（12名男子　６名女子）を対象に講義を行った．受講生の英語力は様々で，２級合格者及び準２級合格者も含まれる．

⑷　講義の展開（全５回）

（１回目）～批判的思考力について知る～

１）批判的思考力とは

まず，学生は「批判的思考力」とは何かについて知る必要があることから，内田（2015）の定義する批判的思考について伝え，一般的なキーワード（ここではOrgan Donation, Global Warming）についてグループ学習の中でプラスとマイナスの内容について日本語で考える活動を展開した．

２）本時の目的

「批判」とは，単に言葉が示すように，物事を批判的に見たり，考えたりするように思われるが，批判的思考の定義としてWikipedia（2017）では，“あらゆる物事の問題を特定して，適切に分析することによって最適解に辿り着くための思考方法である．”と述べられている．そのことを学生は理解し，例に挙げた事例に対し，プラスの面とマイナスの面をグループで討論し（分析）することを目的とした．

３）批判的思考の定義の理解及び，Organ Donation，Global Warmingに対するプラス面，マイナスの面の整理

初めに，グループにおいて批判的思考とは何かを考えて整理し，互いに学び合うことで情報を共有できる雰囲気を作った．ほとんどの受講生は，批判的思考についての理解は初めてであった．定義を理解した後に，以下の①と②についてグループで話し合い，出てきたプラスとマイナスの意見は以下の通りである．

①　Organ Donation

プラス面
- 臓器が必要な人の命を救うことができる．
- 人間として当たり前のことである．
- 特に親族で困っている（必要な人）には提供しないといけない．
- 幼い時から親の影響でドナー登録しているので当たり前にやる必要がある．など

マイナス面
- 親が生んでくれた自分自身の体を提供することに抵抗がある．
- すべての人に提供できるわけではない．提供されない途上国の人々のことを考えると不公平であり，辛くなる．
- 体の一部と言っても，目などの顔の一部は提供できない．　など

②　Global Warming

プラス面
- 森林伐採は二酸化炭素の増加につながるが，森林が人間の生活を営む上で必要であれば仕方がない．
- 温暖化の発生は問題であるが，一つの問題から電気自動車の開発や生産につながっているので，プラスの一面として考える．　など

マイナス面
- 人間が生活できなくなる．
- 社会の発展により，多くのものを生産しようとする利己的な結果だ．
- 車を利用する場所が多く，特に沖縄の観光産業の恩恵は自然を崩壊する負の恩恵とも捉えられる．　など

上記のように，各グループにおいて活発な意見が出てきた．

4）本時を通して，受講生が講義に対しての感想や考えの一部抜粋が以下である．

① 批判的思考とは単に批判するのではなく，良い面，悪い面を考えるということ知らなかった.勉強不足である．

② 同じテーマ（Donation）でも，グループによってそれぞれ異なる考えがあり，多くの意見を聞けて良かった．

③ ただ単に文句を伝えるように物事に対して意見するのではなく，客観的に物事を考え，グループで話し合うことはとても有意義であった．

④ 自分の都合の良い情報を個人的に考えることが「批判する」ということにつながるので，講義での内容は，批判的思考を理解し，実際に考えてみるだけでなく，異文化理解にもつながるのではないかと感じた．

上記のようにアクティブラーニングの手法で批判的思考を活用し，学生は問題解決に取り組んだ．

（2，3回目）～批判的思考力を育む～

1）批判的思考を育む取り組み

日本語及び英語での思考力を高めるために，日本語と英語のTopic②③（上記に記載）を順に提示し，日本語のTopic②に対しては，日本語で考え，英語へと転換する作業を行った．その後英語で記載されたTopic③に対しても同様に，日本語で考え，さらに英語でのアイディアを練りだし，学生はプレゼンテーションを行った．

2） 講義目的

提示されたトピックに対して，プラスとマイナスの面の両方を客観的に日本語で考えた後，直接英語で物事を考えられるようにした．今井典子（2015:18-20）は課題解決型言語活動について「与えられた（あるいは，自ら発見した）課題を，学習者が言語活動を駆使して達成する言語活動である」としている．そのことから，グループで互いに意見を交わし，他者の意見と自己の意見を摺り合わせ，客観的な立場で与えられたトピックに対し考えることができる．また，協同で取り組み，英語の表現方法や伝え方などを自ら考え，主体的に判断し，共有することができる点で，議論を活発に進めるだけでなく，英語学習においても有益であると捉える．また，日本学術会議（2016）においても，

> “母語によるコミュニケーションでは，このような「思考」は無意識のうちにおこなわれるが，外国語によるコミュニケーションを学ばせる場合，その存在を意識させること，そして母語との違いに気づかせることが必要になる．”

とあるように，日本語から英語へと無意識の思考の働きから，英語で考える力を養うために，段階を踏まえて英語学習を行うことは学習者にとって有益であると考える．

3）トピックに対する批判的思考

批判的思考力について十分な理解がされている上で，各グループからは活発な意見が日本語及び英語で話された．全体で情報を共有し，以下がそれぞれの学生の意見及び考えである．

トピック②に対する意見及び考え（日本語）

トピック（あなたは人の心が読む能力がある）

プラス面

- 相手の気持ちを検索，想像する必要がない．
- 相手が自分のことを好きか嫌いか分かる．
- 相手が求めるプレゼントを贈ることができる．
- 社会貢献できる．
- 人にだまされる事がない．　　など

マイナス面

- 相手の本性が分かってしまう．
- 自分が傷つく可能性がある．
- 対人恐怖症になりかねない．
- 知らなくてもいいことを知られる．
- コミュニケーションが取りにくい．
- 隠したいことが相手に分かってしまう．

など

トピック②に対する意見及び考え（英語）

プラス面（英語）
- You can lie to someone.
- You can find person who you like.
- You can understand other's feelings.
- You can be strong in the situation of games and sports.
- You can find honest people. など

マイナス面（英語）
- You can't trust someone.
- Your communication ability will be down.
- You can understand what I don't want to know. など

（学生のワークシートより原文を転載）

このように，グループ活動においては活発な日本語及び英語での議論の時間があった．学生は，それぞれの意見や考えを相手に伝えようと必死な態度で興味・関心を持ちながら，活動に参加していた．英語に翻訳する際には，グループ同士で，試行錯誤を重ねながら考え，協同作業を通して，英語での発表を行った．さらに発展した形で，以下のトピック③（In most countries, people drive on the right-hand of the road. Japan should change from the left-hand side to be like other countries.）について理解し，プラスとマイナスの面を英語で考え，解決策を英語で書き出し発表した．

これまで，キーワードや日本語で提示されたトピックを題材に批判的思考力の育成を目指してきた．ここでは，これまでの段階的な指導を踏まえ，英語でのトピックに対し，アクティブラーニングの手法を活用し，英語での思考力を高める基礎作りを目的としている．以下が各グループの意見である．

プラス面（英語）
- There will be less traffic accidents.
- It is easy to drive in other.
- Foreign people can drive in Japan easily.
- It is convenient for people from other countries. など

マイナス面（英語）
- It costs a lot to make new traffic lights.
- It is not easy to get used to new rules.
- Many accidents will happen.
- Price of cars will increases. など

（学生のワークシートより原文を転載）

各グループとも様々な意見や考えが出た．それぞれの意見や考えを土台とし，問題に対し可能な解決策を検討してもらった．その中で，全体で共有し互いに一致した解決策が以下である．

解決策）" Japanese government should use enough money to change from the left-hand side to be like other countries. "

上記のような実現可能な解決策として，政府の援助が不可欠であると提示した．個々人の賛成・反対の意見がある中で，実行可能ではないかと思われる意見が出てきたことは，批判的に英語で物事を考え，英語で問題解決能力を身に付けられる方向性へと意識が向いていると推測する．

4）本時（2～3時）を通して，受講生が講義に対しての感想や考えを一部抜粋した．

① グループで問題に対して話を進める事で楽しく取り組めた．英語で話し合う事はとても難しかった．英語で文章を考え，伝える事がなかなかできないが，グループの皆と話し合いを重ねてつくりあげることができた．

② 英語で書けなく，伝えられないことがくやしかった．これからもっと英語

力をつけて様々な問題について考えてみたい．

③　グループみんなで意見を出し合ったり，発表するのは楽しかった．

④　一つの解決策を協同で考えて導き出す事はとてもいいことである．これからは英語で物事を考えられるように，日頃から英語脳を作っていきたい．

このように，活動に対して肯定的な意見が多く出てきた．全体的に英語へ対する意識が高く，自己の英語力を高めたい思いがあり，さらに継続して本研究の目的に応じた講義を展開しようと感じた．４回目の講義においても英語において意見が活発に交わされ，筆者はファシリテーターとして学生に必要であると思われる助言を与えた．その中で学生は協同学習を通し，主体的に学ぶ姿勢を持ち，課題に取り組んだ．

（５回目）～英語での批判的思考力を活かし，英語で発信する～

１）「問題発見演習Ｉ」全15回の中での最後の授業である．これまでの講義を踏まえて，最終的に各グループにおいて以下のワークシート（表７）を活用し，「日本の貧困と教育格差の関係」について英語で議論してもらった．

Topic: 1 in 6 children Japan live in poverty. The poverty causes wide disparity in the academic ability of students.

２）本時の目的

英語での批判的思考力を高めるために，課題解決型言語活動を取り入れた．批判的思考を高めることを目的としたこれまでの講義と変わりはなく，学生は授業の流れを把握しており，円滑に授業が進むことを期待された．本授業においては，身近な問題として関わりの深い「貧困」と「教育」をキーワードとした．課題解決について英語で考える機会であり，これがきっかけとなり，英語力向上のみ

表７　内田（2015）のワークシートを参考に筆者が改訂　講義５回目のワークシート

Student number (　　)　Name(　　)

Topic: 1 in 6 Children In Japan live in poverty. The poverty causes wide disparity in the academic ability of students.

WHAT DO YOU HAVE TO KNOW TO SISCUSS THIS??

PLUS　　MINUS

Solutions (New Idea)

Q: What do you have to know to discuss this?

- Parents always watch TV and play TV games. Their behavior is not good for children to study.
- For example, in Okinawa, adults can earn less money than those in other prefectures.
- adults don't have enough money for child to enter college.
- The background of family is bad.
- poverty rate is 15.7% in Japan (10th out of 34 countries in Asia)
- Children don't have enough money to buy stationary.
- suicide by economic reason.
- Poverty children can't go to school.
- need more education outside the school.
- Relative poverty.
- The income of the workers of Okinawa is the lowest in Japan.
- Parents don't work and always use smart phone at home.　　など

（学生のワークシートより原文を転載）

ならず，様々な諸問題に対し，客観的に物事を考えられるような取り組みを目指した．

3）ワークシートを効果的に活用した批判的思考力を高める授業展開

表7で示したワークシートを活用し，議論を展開し，最終的に各グループでのプレゼンエーションを行った．以下が学生からでた考え及び解決策等の一部抜粋である．

上記のように「日本の6人に1人が貧困」,「教育格差を生じている」という身近な問題に対して，批判的に捉えるために必要な背景知識をグループで出し合った．議論を進める際には客観的に問題に対して理解する必要性があることから，インターネットツールを通し，正確な情報を収集し，グループ内でトピックに対して情報整理をおこなった．背景知識として学生から出てきた共通する情報は，キーワードとして,「親」や「沖縄の貧困」,「学校」などが挙げられた．その後，英語で，その情報の中からトピックへ対するプラス点，マイナス点を整理し発表した．

プラス面
- with enough money, they will do the best.
- Poverty people are stronger than rich people (in terms of mentality)
- Strong ambition will be born.
- Children will be stronger than adults.

など

マイナス面
- Poverty people cannot go to clam schools.
- The poverty causes a chain of other poverty.
- Cause economic and relative poverty.
- children lose chance to Study.
- It causes a difference I academic ablity.
- Wide disparity in the academic ability doesn't change.
- Children may die.
- There are many single parents.　など

（学生のワークシートより原文を転載）

プラスの面に比べて，マイナスの面が多く挙げられたのは，トピックの特質上，否定的な側面が多く存在するからであろうと捉える．客観的に情報を良い点・悪い点に分類し，議論することで問題を解決するためにはどうするべきかを創造させ，発表を行った．その発表内容が以下である．

解決策1
- Everyone has to go to high school.
- Society should offer educational programs outside the school.
- To increase money for education.
- To give the scholarship to poverty children.
- University should provide free classes.

など

解決策2
- high school should be compulsory education.
- Unification of salary.
- Free to school tuition.
- To equal minimum wage.　など

（学生のワークシートより原文を転載）

アクティブラーニング型の授業形態において，学生は能動的に与えられた課題に取り組むだけでなく,その中において英語で思考し，相手に考えを伝えることに努めた．これまでの5回の授業において，英語による批判的思考力を高める授業実践はこれからの学生の英語学習にとっても有益ではなかったのではないだろうかと考える．

4）5回の講義を終えての学生の感想の一部抜粋

① 物事を批判的な視点から英語で考えたり，議論するために何を知る必要があるのかなど，今までと自分が生活している中で考えたりするのとは異なり，興味が出た．

② ニュースで見たり,新聞を読んだり,友達から話を聞くときでも片方の意見を聞いてその内容をすべて知っていた

つもりになっていた．クリティカルな考え方ができていないと感じた．

③　物事を違った面で捉えながら，英語で物事を考える事はダブルで頭を使うので，頭の柔軟性が身につきそうです．

④　英語が好きなので，様々な伝えたい内容をどのように簡単に表現したら相手に英語で伝わるかを考えることは今後の英語学習でも必要になってくると感じている．

⑤　プラスの意見やマイナスの意見を出す前にしっかり下調べをすることの大切さを理解した．

⑥　何かをみんなでディスカッションすることで最低限の知識や前提として知っておかなければいけないことはとても重要だと感じた．意見を言う力があったとしても，前提知識がなければ何も意見を持つことはできないし，実際に私もそのような経験があるので，事前に色々と調べておくことは大事だと改めて感じた．

５．「学ぶ意欲」から見る学習行動

問題解決能力を身につけた英語学習者としての意識の向上を測る上で，今回の検証においては，栃木県総合教育センター（2011:15-22）にて作成されたリーフレット「学ぶ意欲をはぐくむ」における「学習に関するアンケート」を活用した．ここでは検証授業の事前・事後における生徒の学びへの意識の変化を捉えた．

表８　学ぶ意欲を捉える各構成要素の解説

レベル	構成要素	解　　説
認知・感情	おもしろさ・楽しさ	結果に依存しない感情で，失敗したとしても感じることができ，知的好奇心が活性化していればえられる感情
	有能感	学習行動がうまくいったとき，成功したときに感じることが多い感情．ほめられることにより，高まることがある．
	充実感	向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じることができる感情．
学習行動	情報収集	主に知的好奇心によって，興味・関心のあることについて情報を集める行動．
学習行動	自発学習	自ら進んで学習に取り組んだり，計画を立てて学習したりする行動．
	挑戦行動	今よりも難しい問題に挑戦する行動．
	深い思考	問題の解決方法を複数考えたり，よりよい解決法を考えたり，仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動．
	独立達成	できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動．
	協同学習	友達と協力して問題を解決する行動．
欲求・動機	知的好奇心	未知のことや珍しいことに興味・関心をもち，それらを探求したいという欲求．
	有能さへの欲求	より有能になりたい，より賢くなりたいという欲求
	向社会的欲求	社会や人のためになりたいという欲求．おもいやりの気持ちとも関連する．

学習に関するアンケートの質問項目は，３つのレベルに分かれ，それぞれのレベルごとに学習意欲を見取る３～６個の要素に分類された内容となっており（表８），全部で28問から構成されている．

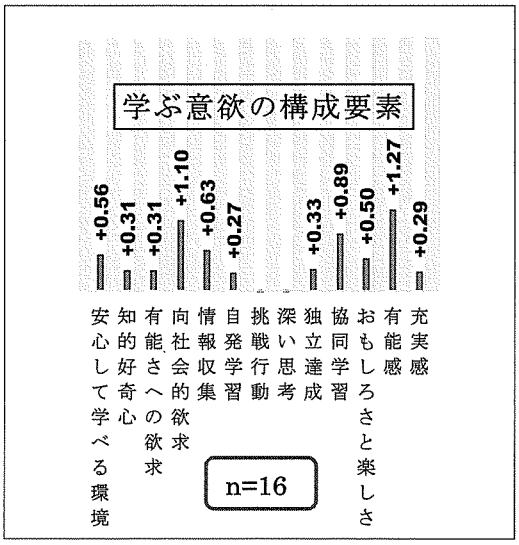

図３　要素別の平均値の事前と事後の推移

その中でも，学習行動の項目は，要素の中に「挑戦行動」「深い思考」「独立達成」などの本研究テーマに関連した内容が含まれていることから，４月（講義１回目）と７月（講義15回目）においてこのアンケートの実施及び分析を行った．質問用紙の質問項目に対する回答欄は，１が「あてはまる」，２が「ややあてはまる」，３が「あまりあてはまらない」，

4が「当てはまらない」の選択式とした．集計方法は，1を選択で4点，2を選択で3点，3を選択で2点，4を選択で1点の4点満点で計算した．そして，生徒が答えたそれぞれの回答の点数の平均点が検証前と検証後でどのように推移したかを分析し（図3），学生たちの学習に向けた意欲にどのような影響があったのかを検証した．その中で，急激な変化ではないが，それぞれのレベルにおいて全体的にプラスの変化が見られた．特に，本研究と関連性のある「協同学習」において0.89ポイントの上昇がみられたことは，協同学習を通し，能動的に学ぶアクティブラーニング型の授業が構築されたと推測する．また，本研究の目的である，問題解決能力を身につける授業実践に関しては，学習行動の中における「独立達成」が0.33ポイント上昇し，授業を通して直面した問題に対して解決しようとする学生の意識の高揚に繋がったといえる．しかし，構成要素の「深い思考」の2つの質問項目の中において，「もっとうまい解き方や別の考え方はないかと考える」は，0.5ポイント上昇，「授業では友だちと話すことで，より深く考えることができる」は，0.56ポイント減少となった．個人で考え，そしてグループで意見を共有する際には授業展開の工夫が必要であると感じた．また，構成要素の「挑戦行動」では，「難しい問題に取り組む」ことに対し，授業の事前事後での差は0ポイントであった．全体的に学ぶ意欲に対し，上昇したようではあるが，授業をさらに改善する必要があると考える．

6．成果と課題

(1) 成果

1）アクティブラーニング型講義で英語を学んだ成果

・生徒は1学年の前期で初めて会う仲間同士で，お互いに学び合い，教え合う姿が見られ，主体的に学ぶ学習者として課題に取り組んだ．

・各グループ間での英語力の差が大きくあるものの，互いに協力し合いながら英語を簡素に伝えようと試み，実践に繋げた．

・各グループで共有した内容を，恥じることなく全体に英語で伝えることができた．これは講義における学ぶ雰囲気の高揚に繋がっただけではなく，学生一人一人の学ぶ姿勢の変化の表れでもある．

2）クリティカルに英語で物事を考えられる思考力育成の成果

・批判的に物事を考えるというプロセスを，急に英語から始めるのではなく，段階を踏まえ，日本語から英語へと徐々に移行することで学生の理解の深まりを感じた．様々な諸問題に対して客観的に物事を捉えるだけでなく，まとめた内容を英語で表現しようと努めた．

・これから直面するだろうと思われる諸問題に対し，多くの情報の取捨選択の必要性を理解させることができた．

・批判的思考力の育成について，本研究実践では英語での思考力を高めることを目標とし，おおむねその目標が授業実践を通して達成できたと考える．

3）問題解決能力を身につける授業実践の成果

・批判的思考力の6段階モデルの「創造性」を育むために，様々な諸問題に対し自己の考えを伝え，意見を共有することで，多角的に物事を捉え，解決できるような態度を育成できたのではないかと考える．

・問題状況を理解・把握した上で，解決しようとするグループでの取り組みが能動的に見られ，各グループでの個々の役割が明確化されていた．

・講義において，英語で考え，問題に対し解決するにはどうしたらいいのだろうかという前向きな雰囲気を感じた．

(2)　課題

・学生全体の英語運用能力の底上げの為には，基礎的な英語力を高める必要性がある．

・「書く」「話す」英語力のみならず，これからは５技能（書く，聞く，読む，発表する，議論する）を統合した授業実践を行っていく．

・グローバルリーダーに必要な要素は問題発見能力のみならず様々な要素が存在する．そのことを踏まえ，これからの講義でも学生が自己開拓できるような実践を行っていきたい．

【付　記】

大学へ赴任し初めての年であったが．多くの先生方からご指導をいただいたことに心より感謝申し上げます．また，講義においても積極的に参加してくれる学生の情熱にこれからも答えられるよう日々精進する決意である．

〈参考・引用文献〉

1）Anderson, L.W. and Krathwohl, D.R., et al (Eds.) (2001) A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives. Allyn & Bacon., MA (Pearson Education Group), pp.27-37

2）今井典子・多良静也・他（2015）『小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型言語活動―自律する言 語学習者の育成』東京書籍，pp.10-24

3）OECD (2013), PISA2012 Assessment and Analytical Framework, OECD publishing:119-136

4）楠見　孝（2012）批判的思考について-これからの教育の方向性の提言-，p3

5）菅原克也（2011）英語と日本語のあいだ 講談社現代新書，pp.46-78

6）Dimmock, C. and J. W. P Goh (2011) Transformative pedagogy, leadership and school organization for the 21st century knowledge-based economy: the case of Singapore, school Leadership and Management, vol.31.3, pp.215-234

7）鳥飼玖美子（2017）話すための英語 講談社現代新書，pp.208-219

8）鳥飼玖美子（2013）グローバリゼーション，社会変動と大学，５「グローバリゼーションのなかの英語教育―国際共通語としての英語をどう考えるか」岩波書店，pp.139-166

9）日本学術会議（2016）ことばに対する能動的態度を育てる取り組み-初等中等教育における英語教育の発展のために-：１-15

10) Bloom, B.S.and Krathwohl, D. R. (1956) Taxonomy of Educational Objectives: The Classification of Educational goals, by a committee of college and university examiners. Handbook 1: Cognitive Domain. NY, NY: Longmans, Green, pp10-24

11）Malm, B (2009), " Towards a new professionalism: enhancing personal and professional development in teacher education", Journal of Education for Teaching, 35 (1), pp.77-91

12）文部科学省（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）:1-19

13）山本崇雄（2016）なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか　日経BP社，pp.20-69

〈参考・引用ウェブページ〉

1）Educational Testing Service (2014)『Test and Score Data Summary for TOEFL Internet-based and Paper-based Test』:3-19
(http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEFL-SUM-2010.pdf)，p.10

2）沖縄県英語教育改革改善プラン（2017）

基本政策4-（1）:1-8
http://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kikaku/chosei/kikaku/documents/kouki7.pdf
3）栃木県総合教育センター 2011『学ぶ意欲をはぐくむ―「学習に関するアンケートを活用して」―』，pp.1-68
（http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/manabuiyoku_h22/）
4）批判的思考（定義）ウィキペディアより（2017）
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%89%B9%E5%88%A4%E7%9A%84%E6%80%9D%E8%80%83
5）文部科学省（2016）都道府県別英語教育実施調査結果:1-8
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2016/04/05/1369254_7_1.pdf
6）文部科学省（2017）生徒の英語力向上推進プラン:1-10
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/08/04/1360076_8.pdf
7）文部科学省（2017）中学校学習指導要領学習指導要領（平成29年３月31日公示）改訂の経緯及び基本方針:3-13
file:///C:/Users/okidai/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/EUY4Q8C8/20171108-114746.pdf

〈参考・引用DVD〉

1）内田浩樹（2015）国際教養大学・内田浩樹教授のライブ授業シリーズPart 6 クリティカル・シンキングを英語授業に